

2023年5月13日

第35回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を読む

「信条」(続)

加藤周一現代思想研究センター研究員
半田侑子

第七段落

電車のなかには、また、人の好さそうな沢山の顔があり、週末には、子供連れの父親や、夫婦もいた。彼らはそれぞれの家庭で、よい父やよい夫であったにちがいない。そのことと、その同じ人間が、昨日までは中国の大陸で人を殺していたであろうことが、どうして折合うのか。日本人の人柄が変わったのか、それとも変わったのは、さしあたりの状況にすぎず、同じような条件が与えられれば、また同じような行為がくり返されるだろうということか。子供に何かせがまれ、しきりになだめすかそうとしている子煩悩の中年の男の顔は、昨日悪魔であったかもしれないその男が、今日は善良な人間であり、明日また悪魔にもなり得るだろうという考えと共に、私には不可解な怪物のようにもみえてきた。性は善なりや。これは信ずるに足りない。性は悪なりや。しかしこれもまた信じることができない。そもそも一人の男について、その性の善悪を問うよりは、多くの人間を悪魔にもし、善良にもする社会の全体、その歴史と構造について考えた方がよかろうという考えに、私はそのとき到達したように思う。それはその場の思いつきというのではなかった。そのときの考えは、その後の私のものの考え方の方向を決定した——どんな人間でも悪魔ではないのだから、私は死刑に反対し、戦争はどんな人間でも悪魔にするのだから、私は戦争に反対する。

〈初出との異同〉

「私は戦争に反対する」⇒私は戦争に反対することをやめないだろう。(初出)

〈人間の性の善悪を問うより、社会の全体、その歴史と構造について考える〉

「変わったのは、さしあたりの状況にすぎず、同じような条件が与えられれば、また同じような行為がくり返されるだろうということか」

⇒日本人が根本的に大きく変わったというわけではなかった

「子煩悩の中年の男の顔は、昨日悪魔であったかもしれないその男が、今日は善良な人間であり、明日また悪魔にもなり得るだろう」「不可解な怪物のようにもみえてきた」

⇒過去・現在・未来、人間は変わりうる。加藤は、今日は善良な人間である男が明日また悪魔になる可能性を示唆する。一人一人の人間の性の善悪を問うより、「人間を悪魔にもし、善良にもする社会の全体、その歴史と構造について考えた方がよかろう」と加藤は考える。

⇒その後の加藤のものの考え方の方向を決定した。Ex.)死刑に反対し、戦争に反対する。

第八段落

電車のなかで席に坐っている男たちは、たいてい居ねむりをして大きく股を開いていた。席に坐るためには、腕力で他人を押し除ける必要があったから、坐っていたのは中年以下の男たちばかりで、女や老人ではない。あるときそういう光景をみた占領軍の若い兵士が、坐っていた男たちの一人を、手まねで立たせ、その代りに女を坐らせようとしたことがある。男は不承不承に立ちあがったが、空いた席には誰も坐ろうとしない。坐れという意味を、兵士は手まねで説明し、女が解るまでには暇がかかり、解った後でも、兵士と立ちあがった男の顔を見くらべていて、容易に動きそうもない。しかし男を立たせ女を坐らせるといふ事業をはじめた以上、兵士の側でもその事業を途中で放棄するわけにゆかなかった。漠然と周囲に向って「すみませんねえ」と咳きながら、困惑した表情の女が坐ると、兵士ははじめて満足し、次の駅で降りていった。周囲の男たちは——私も何度かそのうちの一人であったが——「余計な世話をやく野郎だ」という思いと、「そう言えないのは敗戦だからしかたがない」という思いとの間で、今見たばかりの光景をそれぞれ思い返し、女は、ばつが悪そうに、「占領軍兵士のおせっかいの片棒をかついだのは私ではない」といいたそうな顔をしているが、一度坐った席を捨てて立ちあがるというのでもない。……という具合で、米軍の日本占領は、はじまっていた。いや、それは「占領」とはよばれず、日本側では「駐留」とよばれていた。「降伏」が「終戦」とよばれていたように。そのとき占領軍は日本人を理解していなかったのだろうが、その無理解は、席を起てといわれれば、何もいわずに立ちあがる日本人によって、恒久化されたように思われる。

〈加藤が占領軍の若い兵士の話を書いた意図はなにか〉

鷲巢力『いかにして』による指摘

加藤が観察した敗戦直後の光景の三つ目は、占領軍と日本人とのあいだの関係である。占領軍と被占領地の人びととの関係は、多くの場合、異文化接触であり、支配被支配の関係である。占領軍のもつ文化を被占領地の人びとに強制するという現象が不可避的に起きる。ここに描かれるのは、自分が正しいと信じることを他人もすべきだと考える文化と、自分が正しいとは信じないことでも強い者がいえばそれに従う文化との接触という一面をもつ。

占領軍兵士にすれば、席を立った男は納得したから立ったのだと信じたろう。一方、この光景を目撃した日本人の多くは、男は納得したから立ったのではなく、若いとはいえ占領軍の兵士だからこそ、その若者の指示に従ったのだ、と考えていた。こういう齟齬あるいは無理解は、政治の世界で経済の世界でも起こっていたに違いなく、その後もずっとふたつの文化はぶつかりあっていた。だからこそ国家主義的な考え方をする人たちは、はっきり「[NO]と言える日本」にしたいと考えるのである。

加藤はたまたま目にした光景を語ったのではない。実際に経験し、かつ衝撃を受けた事実を綴ったのである。これらの光景から「日本人のものの考え方とは、いかなるものなのか」という疑問を抱いて、日本人のものの考え方の基本を、歴史をさかのぼって明らかにしたいと考えるようになる。戦時中の知識人の思考と行動、そして戦後の人びとの態度や行動を観察したことを契機にして、『日本文学史序説』や『日本その心とかたち』を構想したのだ、と私は考える。(290-291頁)

〈言葉の言い換え〉

「占領」と言わずに「駐留」

「降伏」と言わずに「終戦」

〈押しつけ民主主義の寓話〉

「席に坐るためには、腕力で他人を押し除ける必要があった」

⇒「腕力」による秩序が形成されており、女性や子供、老人は席に座ることができず、腕力の弱い者（弱者）は黙って見ているしかない。その弱者を救済しようとしたのが若い米兵である。彼は占領軍の一員なので、「腕力」による秩序の外側に存在するといえる。あるいは腕力（武力）によって日本を降伏させたので、その秩序の頂点にいるとも読める（「そう言えないのは敗戦だからしかたがない」）。彼は女性を座らせようとする、その理由は「レディ・ファースト」によるものかどうか不明。米兵の行為は「余計なお世話」「おせっかい」と受け止められる。席を譲られた女性もその感想をもっていたようだ。

「そのとき占領軍は日本人を理解していなかったのだろうが、その無理解は、席を起てといわれれば、何もいわずに起ちあがる日本人によって、恒久化されたように思われる」

占領軍→納得して席を起ったと思っていないのではないか。一般に、身体的には男性より頑丈でないとされる女性に席を譲る美德が米兵には備わっているが、日本男性にはその感覚はなかっただろう。

鬼畜米英から民主主義への転換も、同様に「席を起てといわれれば、何もいわずに起ちあが」った結果ではなかったか。

民主主義が何か理解せずに受け入れたという寓話としても読める。

第九段落

占領がはじまったときに、私は予想したことが起りつつあると考えていた。私は敗戦の具体的な形を予想してはいなかったが、敗戦そのものは予想していた。そう予想した理由は、消極的には、世上わが国の強味や米国の弱味として指摘されていたことが、根も葉もない空想にすぎないと思われたからである。しかし積極的には、そもそも戦争を、民主主義対ファシズムの戦いと考えていたからでもある。世界の歴史は、祭政一致から祭政分離と信教の自由へ、不合理な精神主義から合理主義へ、非能率的な集団から能率的な組織へ、封建的農業社会から産業資本主義社会へ、権威への服従から自主独立の個人主義へ、家柄や男女の差別の強調から人間の人間としての平等の強調へ、次第にしかし確実に進んで来た私は考え、日本のファシズムが、日本社会の「後れ」の絶望的な自己肯定の試みにすぎないと判断していた。社会の「後れ」を基礎とするファシズムと、「進み」を基礎とする民主主義との、世界的な規模での対決には、「歴史」がその決着を予言するだろう。歴史の歯車は逆には廻らない…それが私の信条であり、その信条から出発した予想は、的中し、私の信条への確信は強められた、ということになるだろう。

「私は予想したことが起りつつあると考えていた」

「私は敗戦の具体的な形を予想してはいなかったが、敗戦そのものは予想していた」

「世界の歴史は、〔…〕次第にしかし確実に進んで来たと私は考え、日本のファシズムが、日本社会の「後れ」の絶望的な自己肯定の試みにすぎないと判断していた」

〈当時の加藤の戦争に対する理解と信条〉

社会の「後れ」 V.S. 社会の「進み」

ファシズム V.S. 民主主義

↓

「社会の「後れ」を基礎とするファシズムと、「進み」を基礎とする民主主義との、世界的な規模での対決には、「歴史」がその決着を予言するだろう」

↓

「歴史の歯車は逆には廻らない…それが私の信条であり、その信条から出発した予想は、的中し、私の信条への確信は強められた、ということになるだろう。」

〈加藤の文章表現〉

・「考えていた」「予想していた」「私は考え」「判断していた」

⇒当時の加藤の主観的な考え、予想、判断であり、実際にそうであったか、また、その考えや判断を執筆当時も持ち続けているかには触れない。

・「予言するだろう」「ということになるだろう」

⇒断定表現を避ける。

・当時の加藤の世界観に従えば、歴史が進めば進むほど民主化は進むということになるが、果たしてそうであるか。

加藤は敗戦直後に抱いたこのものの見方を修正することはなかったのだろうか。

〈信条とは?〉

- ① 鷲巢力による指摘「公的な信条と私的な信条」『加藤周一はいかにして「加藤周一」になったか——『羊の歌』を読みなおす』p.292—

公的な信条→第九段落以降、第十二段落まで

私的な信条→第十三段落以降

- ② 田辺振太郎との対談「知識と信条・反科学について」(『展望』(217)、筑摩書房、1977、pp.40-59)

知識と信条とを区別する

加藤「ぼくは、そのところでは、知識と信条、信じることと知ることとを区別する主義なのです。主義というより、そういう習慣です。だから補完的なのは、実は知識と信条だと考えます。人間は、知識だけで暮せるものじゃないので、信条も大変必要でしょう」

- ③ 敗戦直後の「信条」

「私の信条」が雑誌『世界』に1950年9月より一年にわたって連載し、のべ39名が執筆、のちに岩波新書として出版される。

編集者の「まえがき」によれば、「私の信条」と題する欄を『世界』に設け、毎号著名の思想家や芸術家の寄稿を依頼したことは、ロンドン放送局がかつて試みたことから示唆を得たのだという。1929年、ロンドン放送局はアインシュタイン、ラッセル、H.G.ウェルズら世界的に有名な学者や作家に依頼、その人生観を放送したそう。この時にロンドン放送局が出した質問は「神と宇宙と社会とについて、どういう信条をおもちですか」というものであったらしいが、『世界』では「御自分の仕事と世の中のつながりについて、どうお考えでしょうか。この世で何を失いたくない残しておきたいとお考えになるでしょうか」という質問を設定したという¹。

- ④ 信条とは敗戦後の加藤がどのような態度をとるかという「宣言」なのではないか。

第十三段落「戦後の社会に臨んで、私はその他にもどういう信条をもち、どういう経験をもっていたか、あるいはむしろもっていなかったか」

¹ 安倍能成・志賀直哉・小泉信三他『私の信条』岩波書店、1951、p. i - ii

平凡社世界大百科事典より

【信条】

しんじょう

symbolon[ギリシア]//credo[ラテン]

キリスト教の教義の要点を簡潔に述べた定式。〈信経〉、〈クレド〉（“われ信ず”のラテン語 credo より）とも呼ぶ。聖書はキリスト教の教義を述べた文献ではない。それどころか三位一体論とキリスト論を根幹とするキリスト教の教義は古代教会の時代に少しずつ形成されたもので、その過程がさまざまな信条に反映されている。ローマ帝国の迫害にさらされた時代に洗礼志願者は自己の信仰を簡潔な形で公言したのち初めて洗礼を受けられ、教団への参加が許された。その際に用いられた定式が信条のおこりで、これを〈洗礼用信条〉と呼ぶ。洗礼用信条は各地の教会によってさまざまな定式が作られていた。次に、教義論争がさかんに行われた古代教会では、各派がその教説を信条に盛りこんだ。したがってこの時代には信条が各教派の信奉者のあいだのいわば〈合言葉〉の役割を果たした。第1ニカエア公会議(325)は、アリウスの教えを異端としたが、その決議は信条の形でまとめられ、父なる神と子なるキリストの関係を明示する〈ホモウシオス(同一実体)〉なる一語が信条に挿入され、さらにその信条に、異端の教説を奉じる者への4カ条のアナテマ(呪詛、破門宣告)が付加された。これが〈ニカエア信条〉であるが、ふつうこの名で知られ、東西両教会で現在なお用いるのは、元来の〈ニカエア信条〉をさらに整備した〈ニカエア・コンスタンティノポリス信条〉である。ニカエア公会議のちもアリウス派論争が続き、多数の信条が作成された。エフェソス公会議(431)は新たな信条の作成と修正を禁じた。したがってキリストの両性を定めた〈カルケドン信条〉(451)は、厳密には信条ではなく、〈決定〉である。

第十段落・十一段落

予想的の中は、一般に、必ずしもその予想の前提を正当化しないことは、いうまでもない。しかし問題は、知識の確実さではなく、一種の道義感であった。天網恢恢疎にして漏らさず。

このような考え方のすじ道からいえば、占領軍は、軍国主義権力を排除し、民主主義を「押しつける」はずであり、日本の人民ははじめて人権を獲得し、言論の自由を享受するはずであった。世界の歴史の流れからみて、後ろ向きに進んできた社会は、そこで前向きに方向を変えるであろう——という予想は、占領軍司令部が声明や指令を矢つぎ早に出しはじめる、その度に裏書きされてゆくようにみえた。日本を占領した外国の軍隊が掠奪暴行の限り

をつくすであろうという「鬼畜米英」主義者の予想よりは、民主主義を徹底させるために彼らが人民の権利を保護するだろうという予想の方が、正確であったし、彼らが日本中を破壊し去るだろうという予想よりは、米国資本主義が日本という潜在的な市場を破壊するのに熱心なはずがないだろうという予想の方が、現実となった。私は占領軍の声明のなかに、日本の軍国主義を説明して、封建的土地所有と高額小作料、多数の貧農の存在と工場への低賃銀労働者の供給、狭い国内市場、従って国外市場への急激な進出、従って高賃銀国の抵抗、その抵抗を打ち破るための軍国主義……という図式を読み、それが私たちの考えていたことにあまりにも近いということにおどろいた。戦争とその相手方（つまり占領軍）を、私はおよそ正確に理解していたとみずから信じ、理解の理論的枠組み—とよべるほど、体系的なものである、つじつまの合ったものでもなかったが—への確信を強めるようになったのである。その信条の漠然とした体系を、「イデオロギー」と名づけるとすれば、敗戦直後に、私は「すべてのイデオロギーに懐疑的」になっていたどころではなく、今日までの生涯を通じてもっとも強く「イデオロギー」の力を信じていたのである。

- (1) 「予想的中は、一般に、必ずしもその予想の前提を正当化しないことは、いうまでもない。しかし問題は、知識の確実さではなく、一種の道義感であった」
⇒加藤の予想は的中したが、加藤がそう予想した前提を正当化しない。
- (2) 世界の歴史の流れからみて、後ろ向きに進んできた社会は、そこで前向きに方向を変えるであろう—という予想は、占領軍司令部が声明や指令を矢つぎ早に出しはじめると、その度に裏書きされてゆくようにみえた。
⇒「みえた」ということは、実際にはちがっていたということだろう。

驚巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』293-4頁

「天網恢恢疎にして漏らさず」という言葉の意味をほとんどの日本人は知っていたし、「お天道さま」が見ているという意識もほとんどの日本人が抱いていた。しかし「天網恢恢疎にして漏らさず」という言葉も「お天道さま」という語も「道義」という観念も、今日の日本社会から消えつつある。

ファシズムは「悪」であり、民主主義は「善」である。そのように考えた敗戦直後の加藤は、普遍的原理からしても、ファシズムは民主主義に敗れる、と結論づけていた。

このような考え方からすれば、占領軍は「天」の意思を具現するものであり、当然のことながら「民主主義を「押しつける」はず」(七頁、改八頁)だ、と加藤は考えた。

実際、日本国憲法、基本的人権、男女平等、労働組合、言論の自由、財閥解体、農地改革、政治犯の釈放さえも、すべて占領軍によって「押しつけられた」のであって、日本人がみずからの手でかちとったものはひとつもない。日本政府が何を目指していたか、占領軍が何を実施したか、この両者を比較すれば、どちらが民主主義的であったかは明らかである。もし日本政府の思惑通りに政策が進められれば、戦後日本の状

況は戦前の状況と大差ないものになっていたに違いない。

第十二段落

しかもそれだけではない。いくさの間私は身のまわりを眺めて、数限りない日本の「後れ」を見聞していた。しかし西洋の「進み」についてはその実際を知っていたのではなく、書物にあらわれた西洋人の理想をとおして、想像をたくましくしていたのだ。人権宣言は知っていたが、西洋の警察の行動については知らなかった。民主主義的制度の大要は知っていたが、国家権力の対内的および対外的な行動様式については、ほとんど何も知らず、民法上の男女平等の原則は知っていたが、事実上の男女差別については、具体的な例を全く知らなかった。私はすべての「後れ」を日本社会によって代表させ、「進み」を想像上の西洋と一体化して考える傾向を、どうしても避けることができなかった。たとえばアジア諸国は、一体、私の図式のどこに位置づけられていたのだろうか。しかしアジア諸国は、ほとんど私の念頭にうかぶことさえもなかった！

- (1) (経験) 日本の「後れ」 ↔ (観念) 理想化された想像上の西洋の「進み」
- (2) アジア諸国が念頭に浮かばなかった…敗戦直後の加藤はフランス文学に傾倒していたこともあり、この時期の加藤の態度を西洋崇拜とみなす人々からしばしば批判の対象となった。

第十三段落

私の信条の体系は、もちろん、いくさと占領にだけ係っていたのではない。「戦後」の社会に臨んで、私はその他にもどういう信条をもち、どういう経験をもっていたか、あるいはむしろもっていなかったか。

第十四段落

宗教的信条は、私にはなかった。神があるという議論は私には説得的でなかったし、神がないという証明は不可能だろうと思われた。しかし神があるという前提から、どういう結論が導かれ得るか、神がないという前提からどういう結果が生じ得るか、ということには、個人の場合についても、また社会とその文化の全体についても、関心をもちつづけていたようである。

第十五段落

認識論的には、私は懐疑主義者であり、しかし実際にはその懐疑主義に忠実でなかった。すなわち、よほど暇な時でなければ、眼のまえのシナそばが、実在するかどうか、いかにして私が五感を通しそれを知り得るか、というようなことを考えもしなかった。考えたかぎりでは、主体的な私の意識から出発してシナそばの客観性に到達することは困難であり、シナそばの客観的世界から出発して認識の主体の超越性に到達することは困難だろう、と感じ、それ以上先へは進まなかった。従って、たとえば、史的唯物論も、一つの選択であり、全く

同等の資格で、もう一つの選択である主観主義的立場に対立する、と結論するほかなかった。

第十六段落

道徳的信条、そのどれをとっても、つまるところ私にとって絶対的なものではなかった道徳を永遠の星空に比較することはできるかもしれないが、それは抽象的な道徳律一般についてであって、その具体的な内容についてはない。具体的な道徳的価値は、時代や社会やその人の立場に応じ、相対的なものにすぎないだろう。そういう道徳的相対主義は、考えの上で、しばしば私を偶像破壊的にした。社会や伝統が絶対化しようとする価値を、私は絶対的なものとしては認めなかったからである。しかし同じ相対主義は、また、実際の行動の上で、私を保守的にした。新旧の価値のいずれも相対的なものであるとすれば、新を以て旧に代えなければならぬ絶対的な必要もないからである。実生活上の私は、およそ法律をまもり、人畜に格別の被害をあたえず、さりとて格別の福祉ももたらさず、親にはいくらか孝行をつくし、妹には親愛の情深く、そういうことを私自身の利己主義と著しく抵触しない範囲で実行し、みずから択んだ職業に相応の精を出しながら、天下国家を横目にみて、平穩に暮そうとしていたように思われる。

十三段落で「信条の体系」という枠組を提示、十四段落以降は鷲巢が指摘するところの「私的な信条」が三段落にわたって挙げられる。①宗教的信条、②認識論的信条、③道徳的信条の3つである。

- ① 宗教的信条→なし。しかし、戦中に岩下壮一や吉満義彦の著作を真剣に読んだあとがあることからわかるように、加藤はキリスト教哲学に早くから関心を示していた。そのことはのちの『序説』において道徳・倫理的価値観とキリスト教の超越的世界観を論ずることにつながる。
- ② 認識論的信条→懐疑主義者。シナそばの例えはデカルトの方法的懐疑のパロディか。
史的唯物論⇔主観主義的立
- ③ 道徳的信条→そのどれをとっても加藤にとって絶対的なものではなかった。道徳的相対主義。

鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』297頁

懐疑主義的認識論は、おのずから「価値相対主義」をたらず。あるひとつの考え方に徹底することはできにくくなり、ある考え方を相対化し、また別の考え方も相対化することになる。こうして、加藤が拠って立つ知的世界では、「史的唯物論」「主観主義的認識論」も同等の価値をもつことになる。史的唯物論に徹底することはなく、主観主義的認識論に徹底することもない。したがって、徹底した史的唯物論者や徹底した主観主義論者からすれば、加藤の考え方はいかにも「中途半端」にしか見えない。

十三段落「戦後」の社会に臨んで、私はその他にもどういう信条をもち、どういう経験

をもっていたか、あるいはむしろもっていなかったか」と、「戦後」の社会に臨んで」とあるように、「信条」は『続羊の歌』の出発点、また戦後の出発点として位置付けられ、その時点での加藤の状況や考えを提示している。

第十七段落

心理的にみれば、私は元来臆病であったから、せめて考えの上での自主独立を望んだのかもしれない。戦火をくぐってきた勇士ではなく、また勇士であるべく心がけたこともない。また私には青雲の志がなかった。おそらく大志を遂げるために必要な策謀の才能もなかったのであろう。もちろん衣食の足りることを望んではいたが、ぜい沢をもとめなかったし、他人に顧使されることを嫌ってはいたが、他人を顧使したいとは思わなかった。子供のときと同じように私は無愛想で、頑固で、しばしば戦闘的にもみえたらうと思う。みずからそのことを知らなくはなかったが、他人の思惑はあまり気にならなかった。なによりも私は好奇心に溢れていて、世の中で何が起っているかを知りたいと願っていた。また現に、世の中には多くのことが起っていたし、起ろうとしていたのである。

第十八段落

持病と称すべきものはなかったが、食料の不足ということもあって、私は痩せ細り、とにかく筋骨の「男性的」なたくましきからは甚だ遠かった。しかし人間は筋骨のたくましきにおいて、どうせ牡牛にはかなわぬだろうと考えて、みずから慰めていた。「男性的」・「男らしさ」・「男でござる」という風の一連の価値には、もともと深い興味を覚えたことがない。

第十九段落

心理・身体的見地からいえば、私には性的経験が乏しかった。母と妹の他に、婦人との接触は少く、たとえあっても、私は大へん臆病であったように思う。また「ゼンスト」の小屋へ出かけてかたずを呑んだり、春画をあつめて秘かに愉しむということも、私にはなかった。そういうことに興味がなかったからではなく、無精であったからだろう。若い女たちは、焼け野原の東京にも溢れていて、黒髪を風になびかせ、にぎやかな笑声をたて、眼を輝かせながら生きていた。彼らを眺めることは、私の大きなよろこびだった。彼らと話すことは、私には面倒だった。彼らと寝ることは――私はさしあたり考えていなかった。

第二十段落

私は「経験」をもたず、いくつかの「観念」をもって、戦後の社会へ出発しようとしていた。私はそこで「経験」をもった人間に出会うだろうし、「観念」の無限の強みと無限の弱みとを知るだろう。

「信条」を述べた後、その頃の加藤の心理状態（十七段落）や肉体的条件等（十八段落）を述べる。これらの記述によって敗戦後の加藤の性格・外見等がある程度提示し、導入部としている。十八段落の「男らしさ」から、十九段落冒頭は性的経験に話題が変わる。加藤は自身に性的経験の乏しいことを語り、話の主題は女性へと移る。鷲巣力作成の年譜（『加藤周

一はいかにして「加藤周一」となったか』巻末)によると、加藤は敗戦直後の1946年5月30日に中西綾子と最初の結婚をしている。見合い結婚であったらしい。加藤にとって綾子との最初の結婚と、結婚が継続するなかでのフランス留学中に経験したヒルダとの恋愛は人生を大きく変える契機であった。

二十段落「「経験」を持たずいくつかの「観念」をもって戦後の社会へ出発しようとしていた」という一文は示唆的である。十二段落においても「私はすべての「後れ」を日本社会によって代表させ、「進み」を想像上の西洋と一体化して考える傾向を、どうしても避けることができなかった」とある。観念的だった西洋像が留学によって変化し、「日本文化の雑種性」の着想に至り、『日本文学史序説』をはじめとする加藤の仕事へ結びついていく。

以上